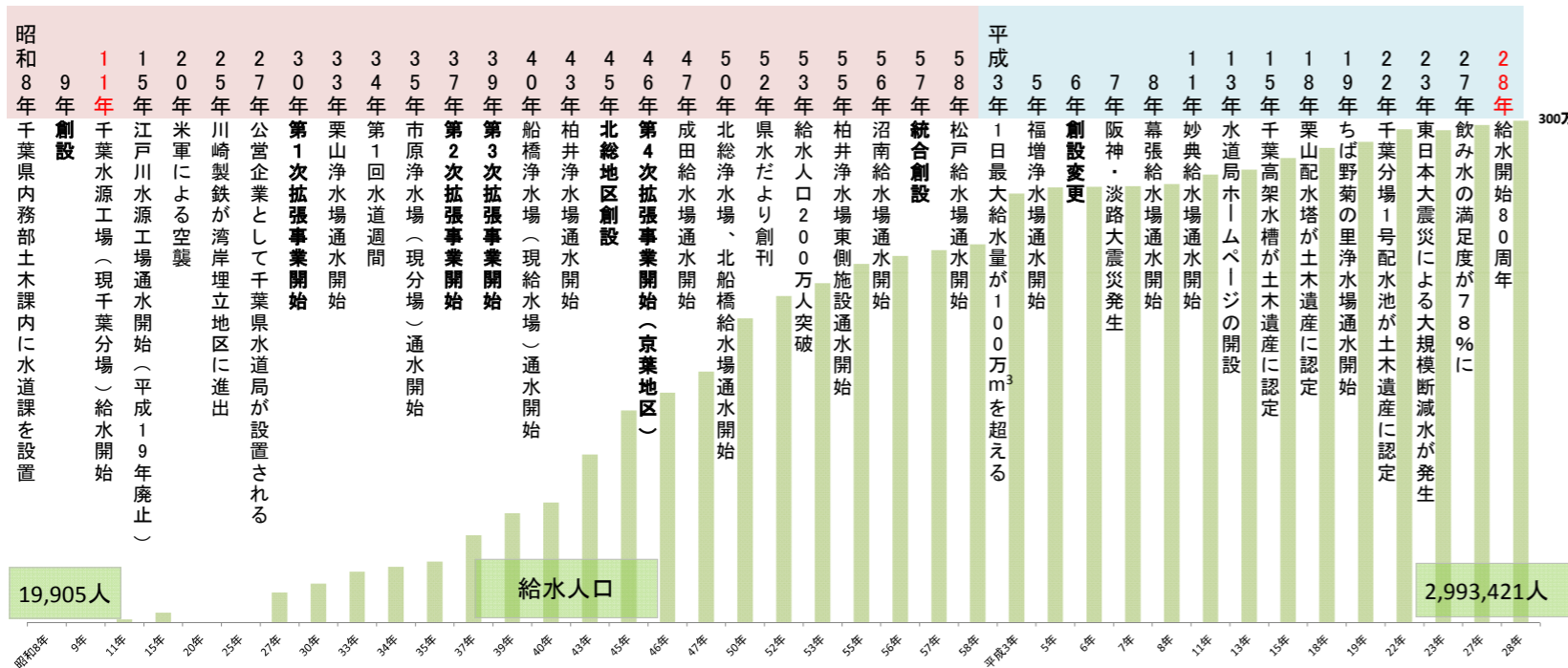




千葉県水道局給水80周年を迎えて

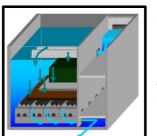


おいしい水づくりの推進について

水道局では、お客様によりおいしい水をお届けできるよう、平成18年度に「おいしい水づくり計画」を策定し、高度浄水処理設備の拡充や残留塩素の低減化などの取組を行ってきました。平成18年度当時の飲み水満足度は30%でしたが、平成27年度の満足度は78%まで上昇し、大きな成果を上げることができました。平成28年度からは「第2次おいしい水づくり計画」がスタートし、安全でおいしい水を24時間365日飲んでいただけるよう、これからも全力で取り組んでまいります。



オゾンの強い酸化力で、においやトリハロメタンの原因となる有機物を分解します。



活性炭吸着池

オゾンで分解された有機物などを、活性炭の吸着作用により除去します。

土木遺産の紹介

昭和12年、県営水道の創設期に2つの配水塔が建設されました。配水塔とは、配水量の調整などのため、地上高くに設置される貯水池のことを言います。「栗山配水塔」、「千葉高架水槽」は建設からおよそ80年経った今も、現役で配水の役割を担っています。地域の歴史的景観をなす構造物であることから、平成15年度には千葉高架水槽が、平成18年度に栗山配水塔が、それぞれ土木学会選奨土木遺産に認定されました。また、千葉高架水槽は平成19年度に登録有形文化財(建造物)としても登録されました。平成22年度に登録された千葉分場1号配水池を含め、県水道局は3つの土木遺産を保有していますが、そのうち2つの配水塔を紹介いたします。

○栗山配水塔

栗山配水塔は建設当時、「千葉県水道事務所江戸川水源工場(旧古ヶ崎浄水場)」の付帯施設として建設されました。昭和18年には、太平洋戦争で米軍の爆撃が激しくなってきたころ、攻撃目標とされないよう、配水塔をペンキで真っ黒に塗ってしまったことがあるそうです。栗山の高台に厳然と建っている姿は、かつては総武線や京成線の車窓から眺望できたと言われていますが、現在は、近隣のビル、マンション等の建設により、遠方からは塔屋が見える程度となっています。



栗山配水塔



千葉高架水槽

○千葉高架水槽

千葉高架水槽は建設当時、「千葉県水道事務所千葉水源工場(現 菅田給水場千葉分場)」の付帯施設として建設されました。千葉高架水槽を含めた千葉分場は平成5年から無人化され、菅田給水場の遠隔操作により運転されています。現在は千葉市の一部への配水の役割を担っています。全国的にも稀な多角形(正12角形構造、バルコニー下部のコーニス(※)風の装飾、建設当時世界的に流行したアール・デコ様式などの特徴的なデザインが評価されました。

※コーニス：洋風建築の軒・壁の頂部、階と階との区切りなどを取り巻く帯状の装飾のこと



東日本大震災の教訓

東日本大震災の発生から5年が経過しました。まだ記憶に新しいこの大災害は、湾岸地域の液状化による大規模な管路の破損など、当局の給水エリアにおいても大きな被害をもたらしました。被害の復旧にあたり、千葉県水道管工事協同組合(以下、管工事組合)や他の水道事業者など、関係機関の協力を得ながら復旧活動を行いました。この経験を活かし、水道施設の耐震化や関係団体との更なる連携強化を進め、危機管理対策の充実などを推進してまいります。

○耐震管整備の推進

地震が起きても安定して水が送れるように、「耐震管」の整備を進めています。「耐震管」は、管の継ぎ目部分の伸び縮みと抜け出し防止機能で、地震や液状化が起きても外れない構造になっています。



水道局職員派遣隊

○熊本地震被災地への支援

平成28年に発生した熊本地震の被災地に、水道局職員と、管工事組合の水道技術者を派遣しました。東日本大震災での復旧経験を活かし、漏水箇所の特定や修理など現地の水道施設の復旧の支援を行いました。



管工事組合派遣隊

水道局80年のあゆみ

1 県営水道発足と背景(創設事業)

千葉県営水道は、東京湾沿いの江戸川から千葉市にかけ、1市12町村(当時)を給水区域として、昭和9年に国の許可を受け昭和11年6月より給水を開始しました。水道普及以前のこの地域では、生活用水を河川水や地下水に依存していましたが、水質に恵まれず伝染病対策の衛生面や、消防用水の必要性など防災面からも水道が求められたものでした。

2 戦後復興期

太平洋戦争では、昭和20年に米軍による空襲を受け、千葉市街地に大きな被害がありました。千葉浄水場などの水道施設もその影響を受け、昭和23年頃には一応の補修修理を終えましたが、資材不足や労力不足のため漏水修理を充分行うことができず、有効に使うことができた水は60%程度でした。

こうした中でも戦後の復興は進み、給水の需要が増大し、昭和27年夏から断水や水の出が悪くなる減水などが発生し、その地域が広がって行く状況でした。

3 高度経済成長期(第1次・第2次・第3次・第4次拡張事業、北総地区水道事業)

このような水不足の状況を解消するため、第1次拡張事業が計画されましたが、水源の確保に難航し、昭和30年ようやく認可を得て、翌31年から工事に着手し、昭和33年に一部通水、35年に全面通水でき、ようやく長年にわたる水不足を解消することができました。(栗山浄水場・大宮浄水場・市原浄水場の建設)

昭和30年代の京葉臨海工業地帯の急速な拡大等により、給水区域内の開発が急テンポで進み、昭和36年には第1次拡張事業の完成を待たず、再び給水能力が不足するようになりました。昭和37年から第2次拡張事業(船橋浄水場の建設等)に、さらに昭和39年からは第3次拡張事業(柏井浄水場西側施設の建設等)に着手し、急速な水需要の増大に対応しました。

それでも依然伸び続ける水需要に対処するため、昭和46年から第4次拡張事業に着手し、成田ニュータウン、千葉ニュータウンや現在の成田国際空港への給水のため、北総地区水道事業を昭和45年に着手しました。これにより2つの水道事業を経営することになりました。

4 安定成長・成熟期(統合創設、創設変更)

昭和57年には、水源の有効利用と施設の効率的運用・重複投資の回避や料金格差の是正と経営の安定化などを図るため、2つの水道事業を、千葉県水道事業(第4次拡張事業・統合)に統合しました。

平成6年には、バブル経済の崩壊による水需要の増加の鈍化、創設事業で建設した古ヶ崎浄水場の老朽化対策、安全で良質な水の供給など、21世紀を見据えた高い水準の水道を実現していくために変更認可を得ました。現在では、成熟型社会にふさわしい持続可能なライフラインとしての使命を果たすため、平成28年度から平成32年度を計画期間とする「千葉県営水道事業中期経営計画」に基づき、健全経営の確保に取り組むつつ、事業を推進しています。



80周年を迎えて

千葉県水道局は給水開始から今日まで、水道水を24時間365日安定して供給するという使命を全うするため、数々の困難を乗り越えてきました。戦後の復興はもちろん、高度経済成長期の急速な工業化や人口増加に対応するため数々の事業拡張を行い、お客様が安心して暮らせる基盤作りに取り組んできました。また、湯水や自然災害など有事の際に適切に迅速な対応が求められてきたことは言うまでもありません。一方、水道事業を取り巻く環境は大きく変化しています。老朽化した施設や管路の更新、耐震化を計画的に行う必要がある中、人口減少社会の中においても一定程度の黒字を確保するなど、健全な経営を維持することが求められています。

これらの課題に対処するため、平成28年3月に、新たに「長期施設整備方針」と「中期経営計画」を策定しました。今後も、これら中長期的な視点に立ち、計画的かつ安定的に事業を推進してまいります。

また、お客様に安全でおいしい水道水をお届けし続けるため、「第2次おいしい水づくり計画」もスタートを切りました。水道水の「質」に対するお客様の要望に真摯に向き合い、これまでに築きあげた信頼をより深めていけるよう、経営面だけではなく、技術的な取り組みについても十分に行ってまいります。

80年の開水道水を安定して供給してきた千葉県水道局の歴史、技術、知識を継承しつつ、さらなる発展に努めてまいります。